京都祇園殺人事件

山村美紗

中公文庫

京都祇園殺人事件

定価はカバーに表示してあります。

1998年9月3日印刷
1998年9月18日発行

著者　山村美紗

発行者　笠松　巌

発行所　中央公論社　〒104-8320 東京都中央区京橋2-8-7
TEL 03-3563-1431(販売部)　03-3563-3664(編集部)　振替 00120-4-34

©1998 CHUOKORON-SHA,INC. / Yamamura Misa Office

本文・カバー印刷 三晃印刷　用紙 王子製紙　製本 小泉製本

ISBN4-12-203236-9　C1193　Printed in Japan

乱丁本・落丁本は小社販売部宛お送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

中公文庫

京都祇園殺人事件

山村美紗

中央公論社

目次

第一章　ちぎられたペンダント　7
第二章　舞妓　33
第三章　デザイナー　59
第四章　謎の女性　85
第五章　過去の殺人事件　110
第六章　記憶喪失の女性　134
第七章　密室殺人　159

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

第八章　墜死した支店長　183
第九章　SMクラブ　208
第十章　黒衣の女　232
第十一章　整形医　256
第十二章　トリックの解明　280
第十三章　意外な犯人　304
第十四章　終局　329
解説　山前譲　354

京都祇園殺人事件

DTP制作　オフィス・トイ

第一章　ちぎられたペンダント

1

谷口麻矢子は、友人のめぐみと一緒に新幹線をおりて、京都駅のホームに立った。

「京都なのね」

「そうよ。やっぱり海外よりよかったと思うわ」

二人は、海外旅行にするか、京都にするかで、散々迷ったことを思い出して笑った。

麻矢子は二十六歳、めぐみは二十五歳で、東京のＯＬだが、大学時代からの親友だった。

今、二人に共通しているのは、それぞれの職場で恋愛し、失恋して心の痛手を負っているということだった。

〈こういう時には、外国よりも、京都あたりへ行ってゆっくりと観光した方が、落ち込んだ気持ちを癒(いや)すことが出来るのではないか〉

ということで選んだ、京都旅行だった。
「ねえ、メグ、まっすぐホテルへ行く？　それとも、街を見ながら行く？」
麻矢子は、タクシー乗場に並びながらいった。
「そうねえ、あんまり荷物もないし、ちょっと手前で車をおりて、歩いてみようか」
二人は、タクシーに乗って、河原町を北上し、京阪電車の四条駅のところでおりた。
「あら、南座だわ」
めぐみが、指をさした。
「正面に見えるのが、八坂神社ね」
麻矢子が、地図を見ながらいった。
「ここから、八坂神社までの間が、祇園らしい感じの場所だって、運転手さんがいってたわね」
二人は、南座前の道を、八坂神社にむかって歩き出した。
匂い袋、つげの櫛、貝殻に入った口紅、舞妓の描かれた扇子やハンカチ、いかにも京都らしい店が並んでいる。
二人が、花見小路通りと交差するところまで来たときだった。
「あっ！　舞妓さんだわ」
めぐみが、大きな声を出した。

だらりの帯に、こっぽりをはいたきれいな舞妓が三人、歩いている。
「写真をとろう！　えーと、どこだったかしら？　あ、フィルムがまだ入ってなかったア」
といっているうちに、舞妓は、路地に入ってしまった。
「あーあ、残念だわ、折角のチャンスだったのに」
めぐみがいうと、麻矢子がなぐさめた。
「この近くに泊まるのだから、また、見ることが出来るわよ」
二人の泊まる祇園ホテルは、そこからすぐのところにあった。
チェックインして、ツインの部屋に通ると、麻矢子は、ベッドの上に、あおむけに寝ころがった。めぐみも、同じように横になる。
「さっきの運転手さんの話では、十二月の南座の顔見世の時には、ここに、中村扇雀さんや、片岡秀太郎さんなどが泊まるのだっていってたわね」
麻矢子がいった。
「祇園で飲むのに足場がいいから、芸能人なんかも、よく泊まるっていってたけど、誰か泊まってないかなあ」
早朝に起きて仕度し、三時間新幹線にゆられて来たので、さすがに、ちょっと疲れていた。それでも、若い二人は、すぐに、元気になった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「マヤ、産寧坂や二年坂の方へ行ってみない？　そのあと、ここへ行きたいわ」
めぐみは、京都駅のキヨスクで買ってきた京都案内のイラストマップをひろげた。
「ああ、古着市ね、私は、古着はなんとなく嫌いだけど、メグみたいに、うまく着こなすといいものね」
麻矢子も、地図をのぞき込んだ。
どっちかというと、麻矢子は、知的で、性格もおとなしいが、めぐみは、髪の毛も栗色に染めてアフロヘアにしているし、服装も、派手で、ディスコの好きなナウい女性である。
「今探しているのは、一九六〇年代のスーツとコート。私は、古着でも、全然、気持ち悪くないわ」
いい終わると、めぐみは、ぴょんとベッドからとび起きた。

2

清水坂の途中の七味家脇の石段からは産寧坂である。産寧坂から二年坂、そして高台寺から円山公園への道は、石段となだらかな坂道が続き、いたるところに、小さな路があって、京情緒ゆたかな場所である。

修学旅行の学生や、観光客も多い。
麻矢子たちは、産寧坂の土産物店を見て歩いていた。
甘酒屋ののぼり、紙人形屋、西陣織の風呂敷(ふろしき)や、反物、手焼きの煎餅(せんべい)屋、八つ橋に、清水焼きの陶器。
二人は、興奮して、一つ一つ手にとってみる。
「アンチックなものもあるのね」
めぐみは、鉄瓶や針箱、時計などの店を指していった。
念願の古着屋もあった。
「これなんかいいと思わない？」
めぐみは、青い透きとおったような生地のコートを肩にあててていった。
「そうね、よく似合うわ、いくらするのかしら？」
麻矢子は、値段を見た。八千円という紙がついている。その間に、めぐみは、また別のブレザーをとり上げて、鏡の前に立っている。
「やっぱり、あのコートがいいわ、あれにするわ」
めぐみが、青いコートをとろうとしたとき、横から、さっと、それをさらった人物がいた。めぐみたちと同じくらいの年の女性だった。
「あの……それは、私が買いたいんですけど」

「でも、持ってへんかったでしょう？　こういうのは、早いもの勝ちやわ。ちょっと、これください」

その女性は、店員を呼ぶと、さっさと金を払い、早速、ブラウスとスカートの上から、それを羽織った。あっという間だった。

「ひどいわ、あんなやり方ってある？」

めぐみは、店を出てからも、怒りがおさまらない様子だった。

「仕方がないわ。彼女のいうように、手に持ってればよかったのよね」

二人は、気分なおしに、隣の甘酒屋へ入って、甘酒を飲んでから、また、歩き出した。

今度は、清水焼きの店に入った。

「記念に湯呑(ゆの)みを買うわ、一緒に見て」

麻矢子は、一つ一つ手にとっていった。

「これがいいわ、私、花の描いてあるのって好きなのよ」

「あら、こっちの方がいいじゃない？　これも花の模様よ、同じ柄のきゅうすもついてるわ」

めぐみは、強引に、すすめる。

麻矢子は、それを手にとってみたが、やっぱり、自分が選んだ方が好きだった。

「メグ、ごめんね、やっぱり、あれがいいわ」

二人は、もとの湯呑みのところに戻ったが、湯呑みがない。
「ないわ。どこかしら？」
「あら、本当ね。あっ、あの人が買ったのよ」
めぐみが、レジで金を払おうとしている男を指していった。あまり、大きな声でいったので、その男が、ふり返った。
「それ、私たちが買うはず……、あらっ、新幹線の中の」
めぐみは、驚いたようにいい、麻矢子を突っついた。
「やあ、君たちか」
それは、新幹線で、横に座っていた三十すぎの男である。麻矢子とめぐみの席は、通路をへだてていて、一緒に座れなかったので、その男に代ってもらったのだ。
「これ買うの？　じゃあ、譲るよ。僕は、どれでもいいんだから」
男は、あっさりと、湯呑みを麻矢子に譲ってくれた。
「うれしいわ。有難うございます。席を代って貰った上に、また、譲っていただいて」
見ると、その男は、もう一人、同じくらいの年齢の男と一緒だった。
なんということなしに、四人は連れ立って店を出た。
歩いていくうちに、アンチックな店構えの喫茶店が見えた。
「じゃあ、ここへ入りますから」

男がいい、軽く頭をさげた。
「私たちも入らない？　マヤ」
めぐみが、突然いった。
「でも、さっき甘酒を……」
飲んだばかりだといいかける麻矢子の腕を、めぐみが、ひねった。
「いいじゃない。私、疲れて喉がかわいたわ」
にこやかに見ていた男が、
「じゃあ、一緒に入りましょうか」
といい、四人は、中に入って行った。
一つのテーブルを囲んで四人が座り、コーヒーを注文すると、その男は、名刺を出した。
「あら、新聞記者の方なのね。久保川陽一さんね」
「ええ、東京から、今度転勤になったんです。名刺は刷りたてで、一枚目です」
久保川が、笑った。
もう一人の男も、名刺を出した。
「放送局に勤めています。彼とは、同じ大学なので、今日は、京都を案内してやろうと思って。野上です」

「私たちは……」
「メグさんと、マヤさんでしょう？」
「えっ、どうしてそれを？」
めぐみが、驚いていった。
「新幹線の中で、ずっと喋り通しだったから、いやでも耳に入りました」
「嫌だァ、何喋ってたかしら」
四人は、すっかり打ちとけた。

3

久保川は、色が浅黒く精悍な感じで、野上は、彫りの深い整った顔をしていたので、麻矢子たちは、上機嫌だった。
二人とも、京都への旅で、すてきな恋人を見つけたいと、夢のようなことをいっていたのだが、それが現実になったのだ。
久保川の方も、麻矢子たちと知りあえて、楽しそうだった。二人とも、独身だときいて、めぐみは麻矢子に、いたずらっぽくウインクをした。
野上の方が、京都には長くて詳しいので、麻矢子たちは、彼の案内で、高台寺を見た

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com